

享月

一

新

聞

橘爪大三郎

に、こうした物質は、①な
かなか分解されないで環境
に残留し、②自然界の食物

Ｔ・コルボーン、Ｄ・ダマノスキ、
Ｊ・Ｐ・マイヤーズ著

環境ホルモンの危険を警告

れに對し、人間の合成した「擬似ホルモン」は分解されにくく、環境にたまるいっぽうなのだ。

雑食性で、地球の食物連鎖の頂点にあるヒトに、影響はないのか。実は人体にも、こうした合成物質がかかり蓄積されており、母乳からも検出されている。この三十年で男性の精子が半分に減ってしまったのも、

道筋を、探偵が犯人を追ひ詰めるようなサスペンスに仕立てている。

ゴア副大統領が序文を寄せているのは、アメリカ政府が本書の警告を重視している表れだろう。妊娠初期の食べ物に注意すれば子供への影響は防げる。日本政府もぐずぐずせず、この問題に真剣に取り組んでもらいたい。

(社会学者)



(長尾力訳・翔泳社・366頁・1,800円)
97年9月30日発売、7刷6万8000部。ダイオキシン汚染など、さまざまな環境問題の特集が最近テレビや雑誌で続いていることもあり、じわじわと売れ続けている。

その影響らしい。

著者は、野生動物の専門家やジャーナリストの三人組。野生動物の異常の原因を探ろうと膨大な文献を調べていくうち、PCBやダイオキシンにたどりつく。本書はその曲がりくねった

橋爪大三郎

書はひとつのドラマのよう
に振り返る。ボールを蹴る、
ただそれだけのことに、全

金子達仁著

力を尽くす男たちがいる。そこにさまざまな物語を読み取る人びとがいる。

著者は、サッカー誌記者出身のスポーツライター。GKの川口、MFの中田の有名選手と交友が広い。彼らへのインタビューや関係者への取材を重ねつつ、最終予選と同時進行で本書をまとめた。加茂監督の更迭と岡田新監督の誕生、FW

三浦力ズから城への交代劇を軸に、監督選手の人間模様や、試合の流れを決定づける戦略戦術など、ファンなら誰でも知りたい舞台裏をあますず紹介する。サッカー中継が二度楽しめるぜいたくな内容だ。

サッカー門外漢の私が最も興味をひかれたのは、傷だらけの日本代表が「戦う組織」へと脱皮していく過

に生まれ変わる。『フラン
スヘー』の大合唱が重いプ
レッシヤ―としてのしかか
る中、結果がすべての過酷
な世界で勝利を自ら手にし
ようとする若い選手らの熱
念が、幸運を招き寄せた。

改革は、やればできる。
日本を覆つてもやもやを吹き
飛ばす奇蹟の逆転劇を、フ
アンは見たかったのかもし
れない。

（社会学者）



(新潮社・1999年・1,300円)
2月27日発売、4刷12万部。今夏のW杯へ向けたサッカー熱を象徴するように、発売前から問い合わせが殺到。最終予選のスコアシートや各選手の紹介など資料も充実。

程だった。指導力のない監督、過去の実績だけでレギュラーに居る選手。そんな状態から「誰でも、調子さえよければ出場する」とができ……悪くなれば外される」という、サッカー界の常識が通用するチーム

世界的なチームへの改革劇

『朝日新聞』 1998.7.26

 売れてる秘密

橋爪大三郎

キャリア官僚の驚くべき本音を引き出し、「ノーパンしやぶしやぶ接待疑惑」の伏線となった「お笑い大蔵省極秘情報」から二年。奇才テリ・伊藤氏が再び、大蔵省の内情をあばく。

今回新たに匿名で証言したのは、キャリア（公務員試験一種合格者）二名、ノンキャリア二名の計四名。捜査に揺れる省内の様子や、次官、局長ら幹部の評判、検査やマスコミへのうらみ言など、やっぱりと納得、いやばとあきれる実態が赤裸々に語られた。

なかでも興味深いのがノンキャリ側からの証言だ。専門実務を一手に切り盛りするノンキャリ官僚を「オイ、お前」呼ばわりし、わざわざ土足を机にのせて報

『大蔵官僚の復讐』

お笑い大蔵省極秘情報2 テリー伊藤著



(飛鳥新社・206頁・1,300円)
6月24日発売、4刷6万部。1作目の『笑い大蔵省極秘情報』は15万部、『笑い外務省機密情報』は10万部のヒット。大蔵官僚は変わったのか——あえて挑んだ2作目という。

告を聞く若手のキヤリア。自尊心を日々痛めつけられるノンキヤリは、他省庁いじめにうさを晴らし、大蔵省を陰で支えるのはわれわれだと胸を張ってみせる。戦前そのままの組織病理をかくえる官僚機構に、いったい国民のためのまともな行政を期待できるのか、ほんとうに疑問だ。

さらに言えば、「これは大蔵省の話」ですまないのが本書の恐ろしいところである。公務員試験の点数や出身大学（東大法学部）があとあとまでついて回るのには、いったん組織にもぐりこめば競争で実力を証明しなくてよい「入り口」文化だから。日本の企業も、政党も、学校も、その点は太蔵省と大差ない。そして、外部からうかがい知ること

「組織文化」の生態を笑う

のでない「組織文化」に守られている。それになじまないと、一人前の「日本人」と言えないのだ。大蔵官僚の信じがたい生懸は、読者の日常に重なる。

それゆえ、テリイ・伊藤氏の「お笑い」シリーズの書眼と手腕に私は敬服する。組織文化になじもうと必死な日本人の姿は、外から見ると滑稽である。それを「お笑い」として成立させる絶妙な距離を戦略的に保ちつつ、伊藤氏は関係者の証言を再構成する。そして取材源の秘密を《死んでも守る》のだと言う。まことにあっぱれである。

（社会学者）

亡きわが子への思い切々



日本中をゆるがせた事件の被害者・淳君の父が、なきわが子の思い出や、犯行への怒り、取材の横暴、少年法の不合理についで綴った手記。あの衝撃的な事件の意味を受け止めかねている世の親たちにとって、何かヒントはないかと手に取りたくなる内容である。

放射線科医師という職業にふさわしく、著者の文章は簡潔で端正だ。淳君の誕生に始まり、成長の歩み、運命の日、懸命の捜索、遺体発見、葬儀、少年逮捕、

『淳』

土師 守著

家族の悲しみと憤り……。時間の経過を追って、淡々と筆は進む。冷静で抑制された文体がかえって、その裏に潜む切々たる思いを、読者につきつける。

これはどう不条理な出来事に、人間は耐えられるものなのか。極限のかたちで淳君を亡くした著者が本書を執筆したのは、行き場のない嘆きと怒りを超え、無意味な犠牲に意味を与えたいと願ったからだろう。

わが子の実像を言葉で丁寧になどりなおし、世の人びとにしっかりと伝え残す。淳君を失った悲しみを人びとが共有できれば、マスコミがあたり立てした無責任な好奇心から、淳君を取り戻すことができる。

こうしたねらいを、本書

は十分に達成している。売上げの伸びが、読者の共感を示している。

ただ、読んでいて辛いのは、著者の冷静な筆致が、ときに乱されることだ。たとえば、逮捕されたA少年一家に話が及ぶ場合。A少年の母が電話番の手伝いに来たとき、なぜたまごっちを二つも持ってきたのか。彼女は本当にA少年の犯行に気がなかったのか。少年が逮捕された後、なぜすぐ謝罪に駆けつけなかったのか。——情としてもっともな疑問ではある。しかし、一部伝聞にもとづいて、A少年の家族を人格的に非難するような言い方は、一方的すぎはしないか。A少年の両親も、極限状況の中を苦しんでいるのだ。

現行少年法の問題点についての指摘は、議論に一石を投じた。今後の慎重な検討に、活かされるとよいと思う。

(社会学者)

「淳」は

(新潮社、220頁・1,400円)
9月15日発売、7刷23万部。担当編集者によると、著者あてに寄せられた封書は80通以上で、20代の読者も多いそうだ。首都圏より郊外の方が売れ方が速かったという。日販のベスト10には7週連続でランクインしている。